



歯学部 教授
賀来 亨

私は昭和57年5月に助教授として歯学部口腔病理学講座(現、臨床口腔病理学分野)に着任し、初代教授奥山富三先生と共に講座の創設にあたりました。創設期には如何に教職員を増やすかなど様々な苦勞がありました。教室が徐々に整備されていく様子は伝統講座では味わえない喜びでありました。講義は全身疾患と口腔疾患を関連付けながら常に行っていました。学生との交流の機会を沢山もちました。基礎講座に大学院生を如何に集めるかいろいろ考えました。放課後学生と共に英語の病理学・口腔病理学の教科書、医学的トピックスなどの輪読会(時にドイツ語で)を積極的に行っていました。また、札幌医科大学の標本館・病理解剖見学など歯学部の学生に興味を持っ

て欲しいと思い、いろいろな企画を行って来ました。高学年の学生には将来の研修のために他の歯学部、医学部の口腔外科、病院歯科などを見学したいという希望があれば、出来るだけ積極的に研修施設を紹介しました。その結果、学生との交流の最も多い、また基礎講座では大学院生の在籍の最も多い講座を作りあげることができました。この間、全学共通講義の導入、90分授業から80分授業への変更など歯学部を含む教育改革に参画する機会を得たことも今思えば懐かしい思い出です。最後になりましたが、長い間のご支援を頂いた教職員と学生の皆様に心よりお礼申し上げます。今後の本学の益々の発展を祈念いたします。



歯学部 教授
五十嵐 清治

本学に奉職して今日まで、大学には大変お世話になりました。私は1979年4月に着任致しましたが、教育者として、研究者として、さらには歯科医師として、他の大学や職場では経験できない実に様々な人生勉強、さらには貴重な体験をさせていただきました。

研究器械や器材が一切なくガラとした大研究室、着任早々の外来診療室の改修工事とはほぼ1年にわたる保存科診療室での間借り診療、開学当初は音別にあった教養部校舎への年1回の臨床特別講義をスタートに、教育・研究・診療のすべてが「ゼロ」からの出発でした。歯学部が開設されて2年目の年から今日まで、実に思い出多い貴重な勉強をさせていただきました。

32年間を経た今、学生諸君に願うことは、まず行動して欲しいと

いうことです。その場その時に与えられたチャンス、目の前の壁(?)、時には困難や不都合、嫌なこともあると思いますが、まずは行動してください。悔いの無いように頑張ってください。行動しないことには何も始まりません。そして行動すると必ず結果が出ます。その結果がポジティブであることに越したことはありませんが、ネガティブな結果はその時々活動のスパイスになるでしょう。

「頑張れなさい」とお尻を叩きはしませんが、悔いの無い楽しく充実した学生生活、人生を送って欲しいと願っています。

歯科界は特に今大変厳しい状況に遭遇しております。しかし、暗闇は必ず明け、太陽は昇り、輝かしい未来が開けます。どうぞ良い学生生活を送って下さい!!



看護福祉学部 教授
倉橋 昌司

1981年4月、東京、旭川に続き、三つめの職場として当別の本学歯学部口腔生理学講座に赴任、その後、1993年に新設された看護福祉学部看護学科生命基礎科学講座に異動し、早30年が経過します。大学では、口腔生理学、人体機能学(生理学)を担当し、歯学部、看護福祉学部ばかりでなく、薬学部や歯科衛生士専門学校の学生諸君とも親しく学ぶことができました。生理学は、いずれの学部、専門学校においても専門基礎となる科目であり、「ヒトの生きる仕組み」を理解しようとする学問です。また生理学は、将来ヒューマンケアのそれぞれの分野の専門職業人を目指す学生のみなさんにとって、己を知り、他人を理解するための必須の学問でもあります。多くの学生のみなさんは、在学

中、生理学は難しい、勉強も大変だと感じるようです。しかし、卒業生の先輩からは、異口同音に、学生時代もっと生理学を勉強しておけばよかったとの反省の声が聞かれます。毎日、規則正しく、よく動き、よく食べ(少し飲む?)、よく休むことは、誰にとっても生活の基本であり、最も重要なことと考えます。学んだ学問も自分の生活に生かすことがなければ、まさに机上の空論です。是非是非、日頃の学習の成果を毎日の学生生活に生かして下さい。

最後になりましたが、この30年間、ともに大学生活を過ごした教職員の方々と学生のみなさんに心より深く感謝申し上げますとともに、みなさまの今後のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。



看護福祉学部 教授
館山 碧

1976年4月、朝、列車で当別に着き、スクールバスで大学へ。この日から35年間の札幌と当別金沢との往復が始まった。退職する者のメッセージには少々ずれているが、35年前の列車での通勤、通学状況を知る人も少なくなったので、記憶をたどり、書き記します。

当時は札沼線下り札幌発8時30分ごろの列車で当別へ。駅前にはスクールバスが待っており、「おはようございます」と言いつつ乗り込む。大学着9時20分頃。玄関(現在の「薬ロビ」と呼んでいるところ)でタイムレコーダーを押す。講義は9時30分始まりだったと思う(事務は9時始まり)。帰りは17時頃、チャイムが鳴り、帰り支度し玄関へ。また、バスが待っており、当別駅へ。17時20分頃の上り札幌行きに乗る。学生の講義、クラブ活動もすべて列車の時刻によって制約されていた。

朝、大学に入ると17時まで大学から出る手段はタクシーを呼ぶか、車通勤の人に頼むしかなかった。この頃の札沼線停車駅は札幌、桑園、新琴似、篠路、東篠路、釜谷白、太美、当別であり、札幌—当別間の所要時間は40分から50分だった。

一時期(1980年頃)、一年間ほど、札幌の大通の日銀横からスクールバスが出ていた。帰りもバスで大通まで送ってくれた。このときは9時出勤厳守。その後1984年、大学前に駅舎ができ、「大学前」で乗降できるようになり、現在に至っている。

今後への期待、複線化し列車本数が増えること、快速ができ所要時間が短縮すること、冬期間の除雪体制の充実です。

最後に、教職員、学生の皆様のおかげで無事、35年間過ごしてまいりました。ありがとうございます。